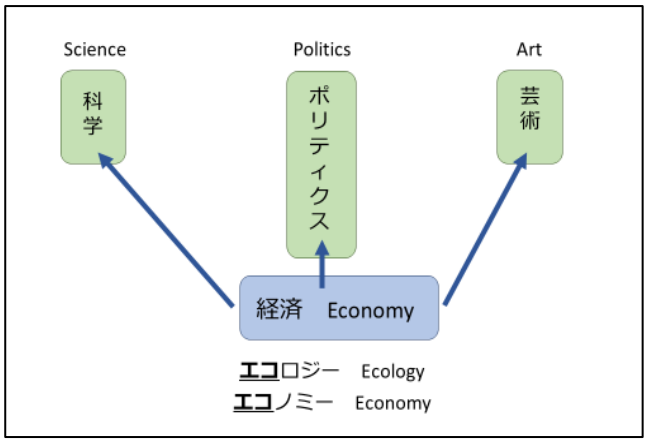
2024.11.19 りそなアジア・オセアニア財団第 12 回環境シンポジウム （於：ウェスティンホテル大阪）

第１部講演録

「アートが生み出す共感とエネルギーの場」

金沢 21 世紀美術館　館長　長谷川 祐子

金沢 21 世紀美術館の館長をしております長谷川と申します。同時にリサーチャーとして、総合地球環境学研究所（地球研）の客員教授をさせていただいています。もう一つ、六本木にある国際文化会館におきまして、今年4月から始まったアート・デザインプログラムのディレクターをしております。今日は、環境とエコロジーという文脈で、皆さんにお話しできることを大変うれしく思います。阿部先生より遠くを見通した大きなお話をということを承っておりますので、まずそこから始めさせていただきます。



先ほど資本主義や経済の話がありました。いま私たちがこの状況を前に進めていくためには、科学、芸術、政策の三つが共にあることが重要ではないかと考えております。従来大事であった資本主義や経済は、それら三つを支える場として存在するという考え方の入れ替えが必要ではないかと思います。

この場合、科学というのは現在情報環境が非常に発展しており、先だってのアメリカ大統領選挙も明らかに AI、デジタル産業がとても強く後押しして勝利につながったと言われています。つまりアメリカの圧倒的な軍事力は、情報力、情報戦略に負っており、それが国の将来を決定していたと考えられます。ここでいう科学とは、情報科学も含んだものです。エコロジーとエコノミーは、非常に言葉が似ています。エコロジーとはもともと生態学で、18 世紀に自然の関係を科学的に検証することから始まりました。その中で「オイコス」というギリシャ語の言葉があり、それは家を前提としています。家の経済、家の中の関係、つまり一定の囲われた環境、その状況の中でその環境を考えるということがエコロジーの基であります。それとエコノミーを合わせていく。全てのものによって経済的な考え方とエコロジー的な考え方を合わせていく、つまりエコノミーを関係性において考えるということは、非常に大切ではないかと思います。

2024年の現在、なぜ芸術が重要なのか？

「人新世」、[資本新世]などと呼ばれ、人間が自然を開発しつくし、変えてしまった時代
人間中心主義、過剰開発、資本主義が引きおこした多くの問題点
分断、環境問題、移民問題、差別、格差社会、世代間の断絶
情報の共有度が増したにもかかわらず、相互理解ではなく断絶が増大する理由は？

共感の時代
言語的コミュニケーションを超えた共感が必要：共感革命（山極壽一）
なぜ芸術が感動を生むのか誰も分析できていない。
芸術は世界を探求する過程を通してオルターナティブな考えやものの見方を提示
想像力の強化、感性や他者への理解力や想像力を養う
創造的なコミュニティをつくる

なぜ芸術が必要なのかということに関しては、これほど生活が便利になり遠くの人の情報が分かるようになったにもかかわらずなぜ断裂が生じるのか。なぜ共感が必要なのか。差異を暴き立ててそれを強調する方向ではなく、何が共通しているのかということを考えなくてはいけません。地球研の所長である山極先生が『共感革命』という本を書かれています。今日のテーマであるダンスも、山極先生からいろいろな意味で示唆を頂きました。人間が二足歩行で歩き始めて言語が発明されるまでの数万年間、ある意味で非常に弱い生き物である人間がどうやってお互い助け合い生きてきたかというところにおいて、ダンスということが一つの比喩になるのですが、身体的なコミュニケーション、身体言語、言葉にならないボイスパフォーマンスでお互いをつないできました。これには、目を合わせる、手を合わせるということも含みます。

いま、社会で断裂がつづく状況において、ダンスが必要なのではないかという発想につながりました。モナリザでも棟方志功でも、多くの方々が名作に対しては共通して感動されます。なぜ芸術が感動を生むのか、実はそれについては誰も分析できていないのです。しかし、優れたものは人が守り残してきたということであり、感動のミームというものが、いま残っている芸術の永遠とした証拠でもあります。私たちはこれを守りたかった、ということの積み重ねなのです。芸術というのは歴史でもあり、人間の感情、感性、そして人の価値観の積み重ねでもあります。そのように芸術見ていただければと思います。

同時に、オルタナティブな考え方、いまあることに対してアーティストは解（かい）をくれません。ただ、なぜという問いを出します。なぜという問いに引っ張られて、オルタナティブなものの見方という、つまり世界をこう見るとなぜが生まれる、それに対して自分が応答していくためにオルタナティブな考え方を身に付けなくてはいけないのではないか、という気づきになります。

いまシンギュラリティの問題が 7、8 年先にあると言われていますが、その AI が人間の知性、機能を超えるとき人間に残されたもの、想像力、感性、他者への感情といったものは、非常に重要な人間に残されたヒューマニティーの基盤になっていくと考えられています。このことは、共感の時代と併せて、芸術、デザインといったようなことに対して皆さんへもう一度関心を呼び戻したいといったところにつながっています。

AI に使われないために
不確実で先のみえにくい現在、AIのシンギュラリティが迫る中、人間として残された重要な領域
想像力、直観、独自の発想、予測し難い近未来に対して、試行錯誤しながら一歩一歩踏み出すアクション　身体と新しいエコロジー（まわりをとりまく状況）をつなぐのが芸術

感覚学習
視覚芸術、建築、デザイン、音楽、映像、メディアコンテンツなど五感によるsensory learning によって人々に今生じている事態に「気づき」と新しい思考をあたえる。
データの視覚化、デザインの重要性
知識の生産knowledge production

キュレーションの機能　新しい体験やものの見方をつくる。
１展覧会を企画実践する
情報をマッピング。異なった要素を組み合わせ関係価値を形成する
作品の選択、コンスタレーション、構成。
美術史、文化史を形成する
２共感の場の創成　美術館ほか展覧会、プロジェクトなどのプロデュース
３出版、パネルディスカッション　パフォーマンス
４コミュニケーション、教育
５文化環境のデザイン

4

ここで、AI に使われないためにということで、申し上げた芸術の可能性の一つでもありますが、感覚学習をご紹介します。皆さん、いまスクリーンで情報をたくさんご覧になっています。先ほど文字面をたくさん見て、漢字のいろいろなステートメントもたくさん見て、でも何一つ頭の中に入ってこないということは、多々あるのではないかと思います。それに対して、センソリーラーニング、五感を通じた学習というものがあります。建築は空間で、デザインはグラフィックな形態で、音楽は耳に、映像は身体の動きということで、さまざまなメディア表現があります。それに対して、それを駆使したかたちで実際の事物、インスタレーション、空間展示に合わせて皆さんが共感して、体験していくセンソリーラーニングが、非常に大事になってきます。併せて、データを視覚化するインフォグラフィックがあります。これは企業からも非常に注目されている部分だと思います。文字だと頭に入らない情報が、グラフィック化されること、映像化されることにより相手によく伝わるようになります。それは、それぞれの方がメディアになるという考え方です。情報を受動的に受け入れるのではなく、それぞれの方たちのナレッジプロダクションになっていく知識の生産、そういうことが非常に大切になってきます。感覚学習の結果として、それが求められていることが実感できるのではないかと思います。

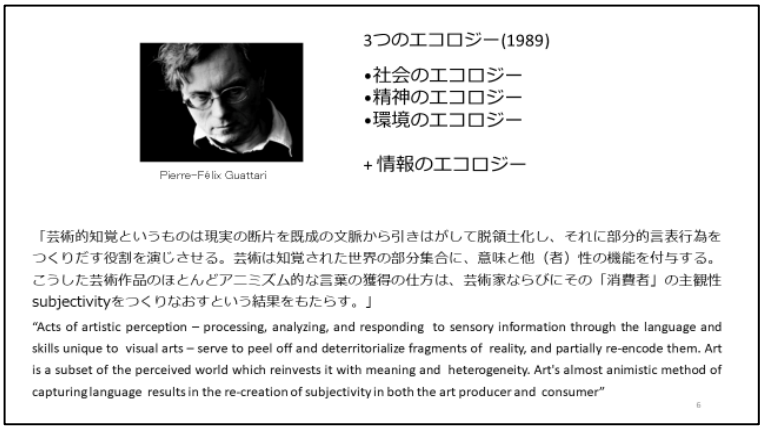
私がやっているキュレーションという仕事は、展覧会を企画します。美術館をプロデュースしたり、美術史を語したりする仕事もありますが、共感の場をつくっていく、体験のデザインをしていく人間であるとご理解いただくといいかと思います。そこには、知性や感性が伴います。

人新世：
人類の活動が地球環境に影響を与えている期間で、明確な地質年代を構成するとみなされるもの

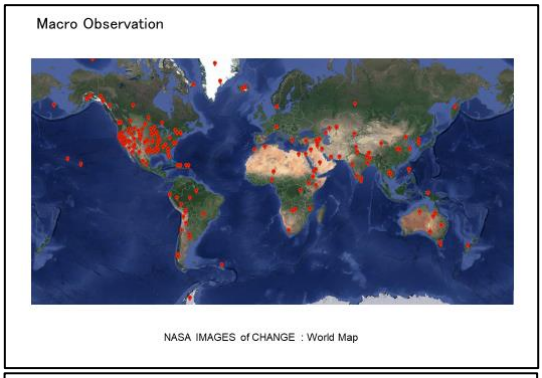
ほとんどの科学者は、産業革命以来、人間が地球の気候温暖化に関与していることに同意している。一部の科学者は、私たちは人新世（*Anthropocene*）と呼ばれる新しい地質年代に生きていると主張している。
— *Nature*、2004年2月12日

https://www.merriam-webster.com/dictionary/Anthropocene

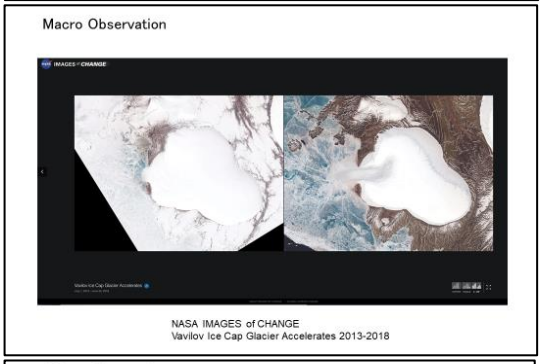
人新世（ひとしんせい）、アンソロポロセインという言葉で人新世（じんしんせい）とも申しますが、人間が開発によって地球をほとんど変えてしまい、ある意味でいまは純粋な自然などはもう残っていない時代という言説です。これはネイチャー誌で 2004 年に発表された記事です。



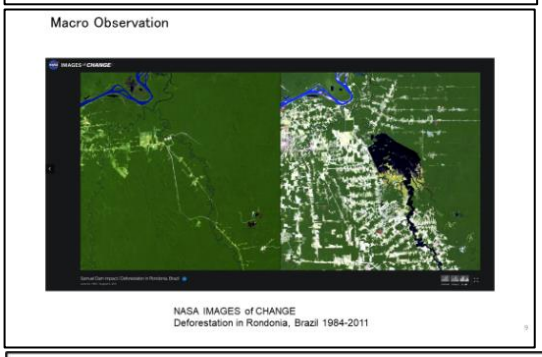
ここでエコロジーという言葉があります。エコロジーとは自然環境のことであると思われる方が多いと思いますが、ガタリという精神分析学者／哲学者が、社会のエコロジー、精神のエコロジー、環境のエコロジー、情報のエコロジーという四つのエコロジーを合わせてというエコロジーに関する考えを拡張しました。



これは NASA が出しているイメージ・オブ・チェンジ、大きな変遷が起こっている場所のビジュアライゼーション（視覚化）です。皆さんでも簡単にアクセスできる情報です。この赤いドットの部分をクリックしていただきますと、そこで起こっている大きなチェンジを見ることができます。これは非常に素晴らしい情報源ですので、見ていただけたらと思います。



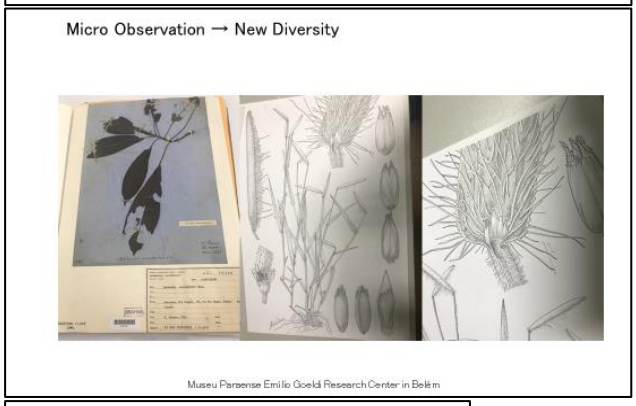
このように、氷河がどのように解けてしまったのかが一目でその変化が分かるように視覚化されており、非常にインパクトが強いものです。どれくらい水面が上がったか皆さん数字で見られると思います。そのリアリティと、この視覚から得られるものとの差はいかがでしょうか。



これはデフォレストレーション、森が壊されていくというブラジルの図です。どんどん森がなくなり、市街地化されていきます。

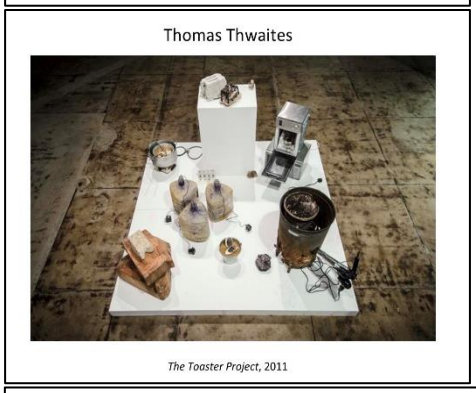
このようなエビデンス、つまり証拠は国際法廷でも使われています。ロンドンにフォレンジック・アーキテクチャというビデオ作家、専門的な科学者、法律家、建築家の方々が集まり作られたシンクタンクがあります。この団体が、トレースエビデンスということで、福島の第一原発から太平洋を渡ってバンクーバー島西海岸まで 7600 キロを 5 年かけて旅をしたセシウム 137 の旅の記録を映像化しました。そうすると驚くべきことに、バンクーバー島西海岸の施設において 5 年前に起こった出来事、セシウムに対して、一つの警報が鳴り始めるのです。

これは展覧会において展示されていたプラスチックの化石です。実際にサンゴもそうなのですが、ピュアな自然のものだけではなくて新しい異物、私たちにとっては人工物で解体できないプラスチックを取り込んでいきます。そのように新しいタイプの化石が生まれていく時代になっています。

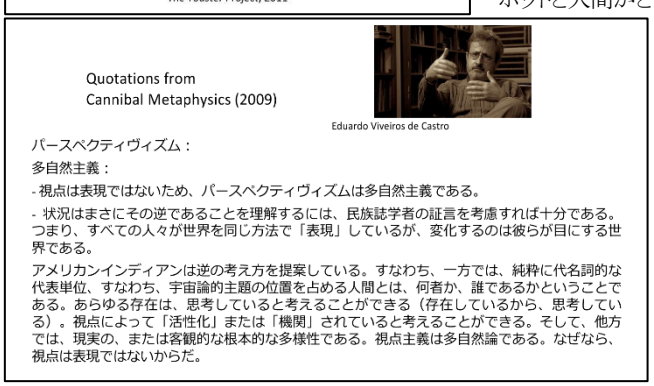


次はオブザベーション、感度を上げるということです。私たちはいま新しい時代に直面しているのであれば、どのようにいま起きている状態を知るのか。これは20年前とはかなり状況が違ってきており、新しいデジタルや写真などの技術だけに頼るのではなく、いろいろ意識を巡らせばアクセスする方法はいくらでもあります。私はアマゾンへ3回調査に行きましたが、これはそこの植物学者の先生たちが描いたもので、よくダイバーシティがなくなるという言い方をしますが、その方たちはダイバーシティを日々見つけていると言われます。手仕事でドローイングを描いていく方法で、それによって差異を見つけていきます。小さなステップ・バイ・ステップが、新しいものを発見する一つの方法になります。その時に手で描くという最も原始的なやり方が機能していくという一例です。

種子の貯蔵庫が北極圏にありますが、水分を多く含む巨大種子はここへ持っていけないため、リオの植物学者レアンドロ・コーラさんはどうやって大きな種子を保存するか研究されています。これが北極点から1300キロメートルの距離にあるノルウェー領スピッツベルゲン島のスヴァールバル世界種子貯蔵庫です。マイナス 30 度が絶えず確保されていたのですが、このマイナス30度が温暖化により危なくなっているとの状況のようです。保存の限界がきていることを、アーティストがポエティックなビデオ作品として発表しています。

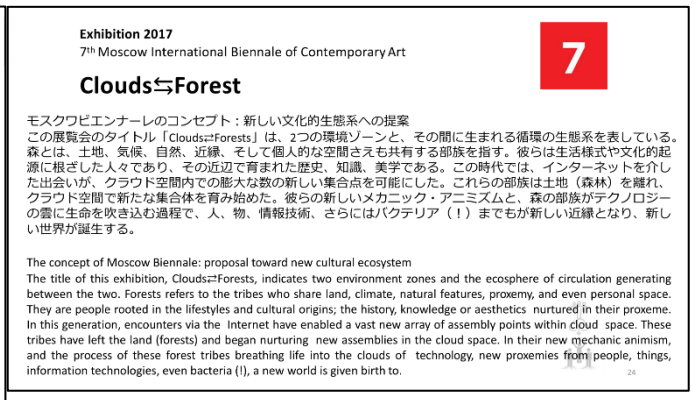


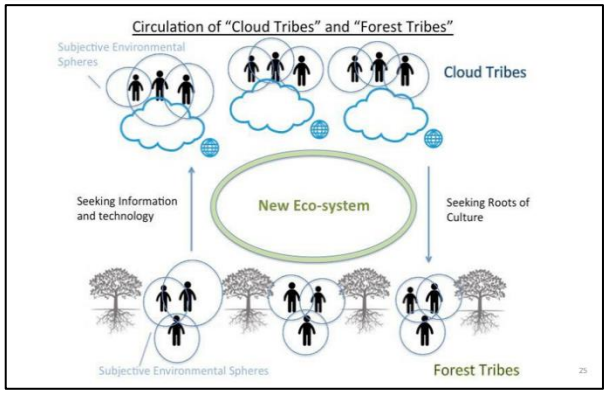
これも最近若い人に顕著な傾向ですが、ポストインターネットの世代で生まれた人たちは、ある意味でデジタルの世界、クラウドの世界に生きています。そのため現実のものが何なのかについての意識の問題から、行動に変化が生まれます。たとえば観光でも、実際にその場所で作っている「もの作りの体験」、あるいはそれは何から来ているのかを巡る「エコツアー」が非常に多くなってきています。それに対してこのトースタープロジェクトというのは、あるアーティストが鉱山へ行って鉄を採取するところから始めて、1 年を費やし全て自らの手でトースターを作りました。それぞれのものが、パーツがどういうふうに作られるのかを 1 年かけて作った作品です。また、AI ロボットと人間がどうやってお互い学び合うことができるかということもありますし、同時に先住民の問題もいま多くなっており、彼らがどういう世界観を持っているかということなども含めて、エコロジーのことを考えるに当たり大きな示唆があると言われています。



これは多自然主義、マルチ・パースペクティズムについてヴィヴェイロス・デ・カストロ先生が話されているものですが、アマゾンにおいては人間と自然の対立項はありません。ネイチャーという言葉がなく全てがヒューマンです。つまりヒューマンといえることは、

全てがヒューマンとしてパースペクティブを持っているということになります。これはある意味で日本のアニミズムに非常に近い考え方でもありますが、日本がエコロジーについて思想的にあるいは世界観としてどう貢献することができるか重要なポイントでもあると思います。これはフニ・クインという種族ですが、彼らは最初宣教師に教わり絵を書き始めたのです。もともと絵を描く習慣はありませんでしたが、こうやって動物と人間が憑依（ひょうい）していくという世界観を、絵を描くことによって表しています。

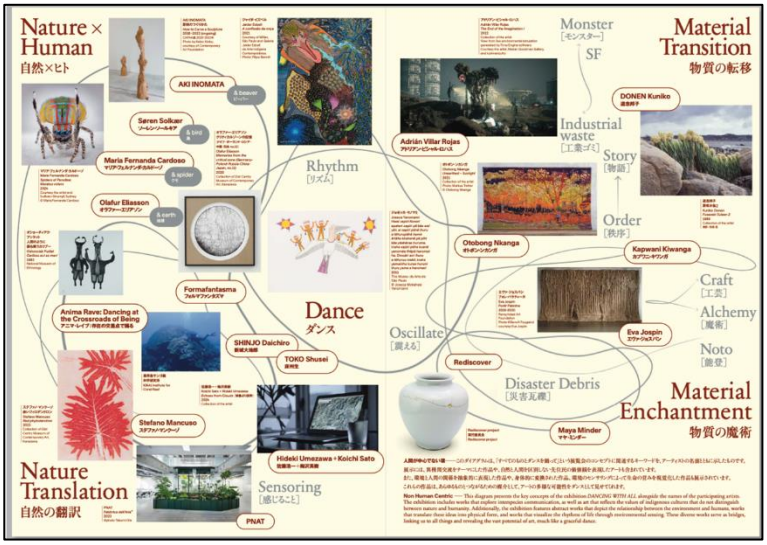




私もいろいろな場所で国際展を行なった経験があります。2017 年モスクワで環境会議が開かれた年にトレチャコフ美術館の中で展覧会を行ないました。新しい文化的生態系への提案というテーマで少し難しく見えますが、上がクラウドの世代です。いろいろな意味でインターネットやデジタルによって世界を認識しその中でネットワークをつくる世代です。この下はフォレスト・トライブと呼ぶ森の部族です。いままで大地に根差して一つの文化や知識を持って生きる人々のことです。デジタルではなく、非常にフィジカルなものです。その人たちのあいだに、断絶ということではなく一つの循環が起こっているということがこの展覧会の一つのテーマでした。エバポレーション、蒸発して上に上がっていき雲になってまた下に降りていくというイメージを持ち、インフォメーションテクノロジーというネットワークの新しい方法を求めて上に上がっていき、文化のルーツを求めて下に降りていくという循環が起こっていく、これをテーマにして展覧会をつくりました。

次にダンスという言葉に応答した展覧会を、いま金沢 21 世紀美術館で開催しています。金沢 21 世紀美術館は、共感の場というテーマと併せて 2004 年の 20 年前にオープンしました。私は開館時に 6 年間建築とコミッションワークを行い、そこには建築と一体となったアートがあります。お客さまが少しずつ来られ始め、新幹線効果もあり現在では 40 万人の金沢の町へ年間 250 万人のお客さまが美術館を訪れます。隣の兼六園が年間来場者 100 万人ですのでかなり大きな数字ということが分かります。なぜ一美術館がここまで人を呼ぶのでしょうか。それに関しては、それぞれ来られる方たちが本当にいきいきと自分自身の居場所を感じることができるからです。明るくガラス張りで、周りに開かれている開放性、相互作用性などといわれていますが、重要なのは、

それぞれの方が自分なりの楽しみ方ができる居場所があることがポイントではないかと思います。



共感のエコロジーとダンスを踊ってということで、一種のダイアグラムを示しています。まず自然と人との関係、動物と人間がどういうかたちで協働し、どういうかたちで関係を持つことができるのかが一つのテーマになっています。次がネイチャートランスレーション、つまり自然に対して自然をどうやって知るのか、どうやって自然をスキャンするのかといったようなことが入っています。もう一つがマテリアルトランジション、物質が転移するということです。この転移とは、先ほどのデジタルといわゆるフィジカル、マテリアルとしてのもののあいだにどのように移行が起こっているかがテーマになっています。もう一つが、ここはいかにもアートですが、物質の魔術化、マテリアルエンチャントメントです。これは、ダンボールが森になるなどいろいろな変異をお見せするのですが、もともと芸術家というのは芸術性とは何かの前にテクネーがあります。つまり、見えない価値を表現する、見えないものを見えるようにする技術です。それが芸術家の持っている一番強い力だと思います。そういうものが昨今なかなか忘れられがちなのですが、そういうマテリアルエンチャントメント、物質の魔術ということで、真ん中にそれら4つ全てが関わってダンスを踊るというコンセプトになっています。地球研の科学者や研究者の方たちと一緒にさせていただいているのが、このネイチャートランスレーション、自然の翻訳という部分です。

～以下展示作品紹介～

【エヴァ・ジョスパン《フォレ・パラティーヌ》2019-2020】

皆さん、この作品イメージは森なのですが、何で出来ていると思われますか。エヴァ・ジョスパンというフランスの作家ですが、実は段ボールでできております。彼女は段ボールを削って、つないで森を作っております。これは平面ですがこの中に洞窟のようなものが作ってあり、それがパースペクティブ、いわゆる遠近法的な空間の広がりを見せています。

【オトボン・ンカンガ 作品展示風景】

これはタペストリー、織物です。絵を描く代わりにタペストリーを使うことは、最近現代作家もたくさん行っています。これはオトボン・ンカンガさんというナイジェリアのアーティストです。海底から海岸までミッドナイトや朝など違う場所の時間をそれぞれ表したものでつながっています。こちらはサンというタイトルで、陽光が触れた昼間の情景が映し出されています。よく見るとゴミがいっぱい落ちているのが描かれています。美しい自然を絵にしているのではなく、実際に漁師の残していた網や海岸にもみがいっぱい落ちております。そういった人間の関わりを、美しいタペストリーへそれも合わせて一つの美にしていくという考え方です。

【オトボン・ンカンガ《Unearthed – Sunlight》2021】

非常に美しい風景に見えるかもしれませんが、森林火災で燃えている森です。芸術というのは美しいものを美しく表すのではなく、時に残酷なものもこのように一つの美で表し、それによって人々の目を向けていくということでもあると思います。こういうタペストリーをなぜ使うのかというと、糸をこうやって引き出して色を重ねていくことによって、人々がそこへ着目するような鮮やかな表現が生まれていきます。同時にいま起こっていることを見てほしいということでもあります。これで燃えている絵を描いても、これとは同じにはならないのです。それは説明になってしまいます。

【フォルマファンタズマ／インフォグラフィック作品】

先ほどお話したインフォグラフィックの作品です。同じ情報でも、もちろん NHK や BBC が作った立派な報道番組がたくさんあります。つまりいま森がこういう状態になっている、私たちの資源はこういう仕組みになっていて、ここに問題があるというドキュメンタリーをたくさん見ます。しかし、たくさん見る中でいろいろな情報がどうやって私たちの中に残るのか、私たちが活用できるインパクトのあるものになっていくのかということへ疑問を持ったイタリアの 2 人組がいます。デザイナーなのですが、名前はフォルマファンタズマといいます。フォルマと

はフォルム、物のかたちであり、ファンタズマというのは、それをファンタスティックにするということです。つまり物をファンタスティックにすることでみんながそれを見るようにすることを考えている人たちです。これをお見せします。これは森を上から撮っています。これは森林資源に対する一つのストーリーなのですが、この緑ベタのところはここへ注視させるための方法で、この部分に彼らのアニメーション、作画があらわれます。いかに酸素が生まれているか、森林火災によって酸素の循環が奪われているか、そのようなイメージで連ねていきます。つまり彼らが考えていることを、このようにビジュアル紙芝居のようなかたちで、一つひとつの状況を説明していきます。ご覧になって、映像が美しいということに対して、おそらく皆さん、緑のこのフレームが機能しているということにご注視いただけると思います。歴史的に過去の科学者たちがどういうことを森の研究で行っていたのかということを延々と話していくのですが、非常にためになる情報が、視覚的に私たちの中に残る映像と要素によって行われています。

【カプワニ・キワンガ／インフォグラフィック作品】

次は、カプワニ・キワンガというタンザニアに起源を持つカナダ在住のアーティストです。真ん中にいるのは彼女です。これは何をしていると思いますか。雑巾で拭いていますね。下にバケツが置いてあります。タンザニアの乾季にはこのような赤いほこりがものすごく立ち上り、樹木が赤いほこりで全部真っ赤になるので、それを彼女が 1 個 1 個拭いているのです。しばらく見ていただくと、また赤いほこりの風が吹いてくるので、また同じようになります。しかし彼女いわく、私たちが環境に対してしなければいけないことは、こういう小さな営みではないか。一見無益でまったく役に立たないように見えますが、こうやって少しずつやっていくことによって、本当に私たちの状況を変えることができるのではないかということを、アートとしてメッセージで出しています。

アートは解を与えるものではないと話をしました。しかし、エネルギーやインスピレーションを与えます。いろいろな困難に直面した時に、自分がやっていることは何の意味があるのだろうと思われた方は多いと思います。しかしこれをご覧になると、おそらく何か違うエネルギー、違う励ましが生まれるのではないかと思います。同時に、この真っ赤な葉っぱに対して緑が少しずつ見えてくると鮮烈なコントラストとなり、印象に残ると思います。

【AKI INOMATA 「彫刻のつくりかた」2018-2024 (ongoing) 展示風景】

次にこれは分かりやすい一つの例ですが、人間と動物のコラボレーションです。皆さんビーバーはご存じですね。ビーバーは木をかじります。食べるということもあるのですが、猫みたいに歯を爪研ぎのように歯をならしていくということもあるようです。これは日本のアーティスト AKI INOMATA さんの作品ですが、ビーバーが実際にかじった木です。五つの動物園に木を渡してビーバーにかじってもらったそうです。それを彼女が芸術的だと考えたものを選んで、ここに3倍の大きさにして作っています。これはある意味で、近代彫刻のブランクーシや円空のようなモダンなかたち、抽象彫刻に匹敵するようなかたちの面白さがあります。ここは人間が鑑賞する大きさで、こちらにあるものがもっとかわいくて、ただのかじりかけが置いてあります。ここに何年生まれの〇〇くんというビーバーの名前が書いてあり、そのビーバーが作りましたよというのが一つのデータとして自然史博物館のように置いてあります。この三つの展示がなされています。AKI INOMATA さんは、真珠貝やミノムシなどいろいろなものとコラボレーションされており、そのやり方を生かしています。これはビーバーとの共同制作であると彼女は言うわけなのですが、動物にとって生きるということが、人間にとっては鑑賞の対象になっていくことも含めて、人間が作るものの芸術性はどこからくるのかという投げかけを行うということです。

【アドリアン・ビシャル・ロハス「想像力の果てⅠ」2022「消失のシアター」2017】

これはもっと芸術的なかたちをしていますが、金沢 21 世紀美術館は今年 1 月 1 日能登地震があり、天井が崩落しました。天井のガラスが一部崩落したのですが、その 800 枚を結局全部外したのです。そうすると、天井は本当にワイヤーや蛍光灯がむき出しの悲惨な状態でオープンせざるを得なかったのです。それに対して、アドリアンというアルゼンチンのアーティストは、このマリア像を置きました。これはご存じのように、出産の聖母という名前で美術史では語られる、懐胎しているマリアです。20 メートルのキリストを孕むマリアの巨大な天井画を描いて、壊れた天井を塞ぎました。そのようなかたちでアーティストが、起きた自然の震災に対して応答していくこのエイドリアンさんの提案に対して、非常に私は心打たれました。結局スプリンクラーがないと美術館の展示はできないので、スプリンクラーの部分全部自分の絵に穴を開けてしまったのです。この下のものは、自動車工場などから産業廃棄物を集めてコンクリートで固めた怪物のような彫刻です。この廃材で作った人間の想像力を超えたものがマリアの下にいるという、私たちのある意味これから先にいくべき未来のようなものを予言する作品ということが出ています。自然とアート、先ほどの共感という話をした時に、このような芸術の役割というのは非常にクラシックではあり

ますが、いまなお非常に重要な部分ではないかと思います。

【「リディスカバー・プロジェクト」2024】

これは、ぜひ皆さんに共有していただきたいリディスカバー・プロジェクトです。能登半島にはご存知のとおり陶器として九谷焼と珠洲焼があります。それに対して漆に輪島塗があります。工場も工房も全壊しました。そうすると、おびただしい破片が出ます。それを全部持ってきて破片を2次避難させた集団がいるのです。その方たちが金沢市郊外に小さい工房を仮設で建てました。輪島塗りの職人さんは 2 カ月休むと手が忘れるといいますので、手が忘れないうちにどうやって輪島塗の技をそのまま継続していただけるのかということで、面白い破片を選んできて加工し、部分的に例えば金箔と漆を使い、壊れたものを修復するばかりではなく、壊れたかたちをある意味で新しい意匠として見ていくという創造を提案されたグループがいます。これはまだ現在進行系ですが、この春にミラノでも展示されました。これは非常に美しい一つの例で、金継ぎで壊れた状態をこのようなかたちにされています。

美術館というのは、新しい産業を生み出す場所ではありません。芸術もそうではありません。どのように新しい価値をつけていくか、新たな価値や意味を生産する場所であると思います。そういうことから、元々の形ではないから捨ててしまおうということではなく、それをどういうかたちで別の物に生まれ変わらせるかということが非常に重要なことかなと思いました。

【ジョゼッカ・ヤノマミ族の絵画作品　2011】

次は先ほどお話ししたアマゾンのヤノマミ族の人々です。ネイチャーという言葉がない全てがヒューマンであると申し上げましたが、全てが一体となっている非常にピュアなものです。何を表したいのか、これはシャーマンがいて、そういう霊界と自分たちが生きている場所をつないでいます。シャーマンの見たビジョンということを絵として表します。つまり彼らにとって絵は、自分たちの想像力や世界観を伝達するための方法であり、その絵が自分たち生活を助けてくれるという意味でのマーケットに入っていく方法でもあります。そのようなかたちで世界観が表されています。いま、マーケットの上では急上昇しています。

【ジャイダ・イズベル《A confissão da onça》2021】

これはジャイダ・イズベルの作品で、彼はシャーマン本人です。鳥の精霊が描かれており、いろいろなものが少しずつかたちを変えながら一体となっている世界観が表されています。ジャイダは 3 年前に自殺されました。彼はアートアクティビストということで、自分たちの場所や文化を守る先鋒に立っていましたが、自分自身を犠牲にしたのではないかという話も聞いています。

Fabbrica dell'Aria® PNAT 2023　©photo Takumi Ota

とても実用的なものを紹介します。私が最初に提示した図を思い出して下さい。科学と芸術、これは人文が復興した 16 世紀レオナルド・ダ・ヴィンチが最初に象徴的に始めたことでもあります。彼は解剖学から始めました。JINS という眼鏡会社をご存知でしょうか。社長の田中さんがアートに関心を持っていらっしゃるのですが、5年先に壊されてしまう建物を借りられ、どのように改造してもいいということで、建築家の方々が自由に改装しました。私もその改装プロジェクトへ一緒に携わったのですが、何か未来を感じさせる新しい場所、働いている社員に新しいインスピレーションを与えるものを持ってきてほしいとのことでしたので、PNAT というシンクタンクを紹介しました。これはプラントネイチャーというもので、植物神経科学の一人者であるフィレンツェ大学のステファノ・マンクーゾ先生は、植物には神経や知性があると考えられておられます。これは、バイオフィルター、すなわち空気清浄機です。ただ植物がガラスの中に入っているだけではないかと思われるかもしれませんが、空気をこの下から取り込み、土の部分で 1 回フィルタリングがかかり、この中で植物によってフィルタリングが二重にかかります。概ね 300 平米くらいの大きなフロアですが、それ全体を清浄化します。部屋の各所につけられたセンサーで、いまどういう状態かがモニターできます。通常の機械の空気清浄機と違う点として、精緻なナノミクロレベルでウイルスやバクテリアなどをフィルタリングする力があるということが報告されています。ここはフリーシート制で、他の階にもオフィス部屋はあるのですが、みんなこのフロアへ降りてきてしまうので、少し交通整理しなくてはいけないという話になっています。頭痛がなくなったなどいろいろな症例が報告されていますので、それは JINS のウェブサイトから見ていただけたらと思い

ます。

先生がもう一つ作られているものとして、水耕栽培があります。非常に大きなピラミッド型の水に浮かぶ畑を作られて、それが 4 段くらいになっているのですが、100 人くらいの小さな村の人々が食べる野菜を育てることができます。水の上にある野菜畑で、そういうものをデザインして賞を取られたりされています。

～以下展示作品紹介～

【PNAT 「トーキング・ゴッド」 2021 / 2024　展示風景】

これはいま展示室の中にあるものですが、先生いわく、私たちは動物については映画でも絵でも「動物がいたよね」とみんな言います。しかし植物は、よほど松の木が好きな人は松の木があったと言いますが、皆さん植物がいたとは大抵言わないとおっしゃるのです。世界のバイオマスの 97 パーセントを占める植物に対して非常に失礼ではないかと先生は思っておられ、植物は人間がいなくても生きていけるが人間は植物がいなければ生きていけない。そのことを分かっているのか言っておられます。これは植物の声を聞くというプロジェクトで、トーキング・ゴッドというタイトルが付いています。これは美術館の中のガラスの展示室に植物が置いてあり、奥に大きなモニターが置いてあります。これをお見せします。

見ていただくと動いています。この信号はどこから来ているか想像できますか。美術館から歩いて 15 分のところに、神明宮という大きな神社があります。そこに、樹齢 1000 年の大ケヤキがあり、その大ケヤキの上にセンサーを付けています。大ケヤキは水を吸い上げ、光合成を行っているわけですが、吸い上げる時は本当に膨らむのです。木が信号を出しているということですが、そのセンサーを 1 回フィレンツェ大学まで飛ばして、そのフィレンツェ大学から戻ってきた信号がこれです。これは木が話していると先生はおっしゃいます。

これは若い方にとても人気があり、1000 年の木が自分にしゃべっているという非常にリアリティがあります。木は何も言わないのですが、木自体が非常に多くの信号をお互い出し合ってコミュニケーションしていることは、概念では皆さんご存じだと思います。しかしこれをご覧になると、可感性、気付きを与えてくれます。それだけの機能がやはりあるということです。

【ステファノ・マンクーゾ《Ailanti e monstera》2023】

先ほど、ダビンチの話をしました。これはモノタイプというダビンチが最初におこなったものですが、マンクーゾ先生は朝、庭から植物を取ってこられて午前中モノタイプを制作されます。一般に絵を描くことが達者でないと植物学者はできないと言われるのですが、この描画力に加えてより植物のかたちを鮮明に捉えるためにということで、植物を紙の上に置き大きなプレス機で特殊インクをつけて刷っておられます。先生は、午前中はアーティストとしてそのモノタイプの作業を、午後は授業や研究をされています。展示をご覧になって皆さんが驚かれるのは、植物がダンスをしていることです。自然の中にある様子をそのまま植物学者の視点で持ってきて一つの構図にされているからだと思います。

【オラファー・エリアソン《クリティカルゾーンの記憶 (ドイツ―ポーランド―ロシア― 中国―日本 no.11)》 2020】

これは、オラファー・エリアソンというデンマークの作家なのですが、この作家がなぜこの作品を作ったかというと、カーボンフットプリントへの意識からです。コロナの時に私はエリアソンの個展を東京で開催しました。その時にベルリンにいる作家が、飛行機は使いたくないと言ったのです。ではどうやって運ぶのかというと鉄道があるじゃないと言われて、シベリア鉄道で作品を運びました。運ぶ時に木の箱に入れるのですが、木の箱の上にこういうそれぞれ小さいボックスを置き、ボックスの中にいわゆる振動計のような、振動によって絵を描くことのできるドローイングマシーンを入れたのです。それを 12 個、違う高さに設置し、シベリア鉄道を通ってきて船に乗ってやってくる振動が、このドローイング、絵を描いています。つまり彼は、地球の表面の凸凹が描いた絵だというわけです。つまり、いま飛行機で 1 日で運べるものを 3 週間かけて運ぶことの意味は、単に時間を失うだけではなくその時間の中で起こる出来事に意味を見いだしてほしいということだったのです。ただその時一番問題になったのが保険です。何千万円もする芸術作品をベルリンから運ぶので保険をかけなければならないのですが、かけてくれる会社が一つもなかったのです。列車でこのような高級品を運ぶという制度ができていない、つまり全てが資本主義的な、利便性、最適化の下(もと)に行われていたということです。

【ソーレン　映像作品】

これはムクドリです。ソーレンという作家は、6 年間このムクドリの群を追いかけて作品をつくりました。これは CG ではありません。これを見ると群体の知恵がわかります。大きくかたちを変えるのは、大きな鳥や外からの攻撃にあったときに巨大な群れを作り縦横無尽に形を変

えることで自分たちを守るという、ある意味で生と死のダンス、命に関わるダンスなのです。

【マリア・フェルナンダ・カルドーゾ《Spiders of Paradise: Maratus volans》2024】

これはマリア・フェルナンダ・カルドーゾの作品で、4 ミリのとても小さいクモです。これが踊ります。全てダンスを踊ってという展覧会なので踊りをなるべく入れたいと思ったのですが、これは本当に踊ります。アートの起源、つまりアートをつくるのに大きなブレーンはいらないということです。クジャクグモ、ジャンピングスパイダーといわれるオーストラリアに生息するクモで、八つの目があります。こちらは雌のクモです。後ろに雄がいて、彼はメスを前に踊ります。雄が雌を引き付けて、ちゃんと生殖行為を行わないと生きていけないので、これは生殖のためにひたすらこうやって踊るわけです。これが一つの美学になっていく、これがダンスなわけです。これも命に関わるダンスです。

アニマ・レイヴ　存在の交差点で踊る

- 無生物、植物、動物、そして人間ーそれぞれ異なる存在は、その違いゆえに補い合い、ひとつの生命の網を編み上げています。日本の霊長類研究の先駆者である今西錦司（1902-1992）は、生命とは一つの存在から分化し、現れる構造の連なりであると語りました。私たちが直面する環境問題への深い理解もまた、人間と自然を対立させるのではなく、動植物、微生物、原子レベルの物質、そして長い時を刻む鉱物やサンゴなど、自然と人間の"あいだ"の移り行くすべての「アニマ」と、言葉を介さないコミュニケーション（応答・交換・生成）を通じて得られるものです。
- 金沢21世紀美術館と総合地球環境学研究所（地球研）が協働するこのプロジェクトでは、アートを媒介とし、異なる存在との"あいだ"に出現する身体を通じた共感関係の構築を試みます。研究者たちもまた、アーティスト同様に鋭敏な感性を持ってフィールドに出向き、そこで得られる気づきや感動は、論文という形では伝えきれないものが少なくありません。このプロジェクトは、そうした研究者の探求の喜びと感動を、言葉を超えたアートとして表現し、共有することを目指します。地球環境を単なる知識として捉えるのではなく、そこに生きるすべての存在との繋がりを感じ、研究者・アーティスト・建築家・キュレーターがそれぞれの視点を交差させつつ創作の方法を探求してきました。

51

総合地球環境学研究所

- 総合地球環境学研究所（地球研）は、2001年に京都府京都市に創設された国立の研究所です。地球環境問題を「人間 humanity」と「自然 nature」の関係はどうあるべきか、という広い意味での人間文化の問題として、文理融合の研究により根本からとらえ直そうとしています。研究者は研究室に留まらず、世界中のフィールドに出ていき、社会の人々と協力して課題をあぶり出し、新しい枠組みと解決方法を見出すために活動しています。

アニマ・レイヴ／クレジット

総合地球環境学研究所｜山極壽一、阿部健一、吉川成美
Sustai-N-ableプロジェクト｜林健太郎
有機物循環プロジェクト｜大山修一
LINKAGEプロジェクト｜新城竜一、高橋そよ、久保慶明、安元剛
SceNEプロジェクト｜渡邊剛、山崎敦子、重定葉子
アーティスト｜保良雄、澤崎賢一、ガラージュ、藤枝守
建築家｜能作文徳、常山未央
キュレーター｜長谷川祐子、本橋仁
協力　総合地球環境学研究所（上廣環境日本学センター）
三菱ケミカル株式会社

52

地球研の方たちと協働してプロジェクトを行ないました。研究者の方たちが考えておられる一つひとつの観察、調査を、どうやって美術館の中で見せるのかというものです。

A. 土
Sustai-N-ableプロジェクト, 有機物循環プロジェクト× 保良雄

- 体温の交換を通して、異種間コミュニケーションを行います。そのために、生ゴミを投入するこで、室内を温めるコンポスト温室をつくりました。投入された生ゴミで微生物は食事を取り、体に熱を発します。その熱は、上昇気流で運ばれて上部の空気を温め、バナナの越冬を支えます。ここでは人間が不用とした食品残渣が、微生物のちからを借りて有用な土に変わり、温室内にあらたな循環を生み出します。そこには、単なる人工環境を超えた、生き物同士の協働で構築されるあらたな系が生み出されます。また、大地の現代的な課題を考えるために、見えない存在との接し方を考えます。そのテーマとなるのが、「窒素（N）」の存在です。

Anima Rave: Dancing at the Crossroads of Being　Installation view
Soil　Organic circulation project,Sustai-N-able Project X Takeshi Yasura

アニマ・レイヴ 存在の交差点で踊る　展示風景
「土」有機物循環プロジェクト、Sustai-N-ableプロジェクト×保良雄

土をテーマにしたもの、これは分かりやすき、美術館の外にコンポストをつくり、内部が 39 度くらいの温度になるので、北陸の冬にバナナの木を育てようというプロジェクトです。

B.島と水
LINKAGEプロジェクト × 澤崎賢一

- 透明な水を介した交換が生まれる場所ーそれは人と人との関係にとどまらず、人と海の生き物の間でも行われています。奄美群島の与論島をはじめとする島々には、島のでき方による地質の違いから、島ごとに異なる水との向き合い方が生まれました。生命の源である水の流れは、漁業、生態系、そして生活文化までを一つの流動体として結びつけています。
- 奄美群島に集まる、地質学や文化人類学、社会学にいたるまで、研究者たちがサンゴ礁や水の循環に対する様々な視点から島を観察し、その映像をメタ映画／コモンズ映画という手法で、会期中に更新される映像によって島の現在を捉えます。

C. サンゴ
SceNEプロジェクト × 藤枝守, ガラージュ

- 「すべてはサンゴ的である」という研究者の言葉は、喜界島の海から大地へ、土地から家へ、そして社会構造へと至る、島の様子を聞くごとに説得力を増していく。数万年かけて島を作り上げたサンゴは、いまなお生活の基盤であり続け、あたりまえに日常のなかにサンゴのもとに暮らしている。
- サンゴ石をくり抜いてつくった芋洗い用の鉢「フムラー」を使った、藤枝守のサウンドインスタレーション。また、サンゴが内包する数万年かけてえられた内部構造が奏でる音は、島の通奏低音として響いている。

他にも、島と水、サンゴをテーマとしたプロジェクトを展示しています。

このようにしてビジュアライゼーションをどのように行うかということをやっており、今回は命がテーマということで、日本の資源にとって一番大事な 75 パーセントを占めている山林の問題をテーマにした展覧会をいま岡山北部の5つの市・町で行っております。森林という私たちの基本的な資源に対して、それをどのように活用するかということも含めて目を向けていただきたいということです。

～以下展示作品・演劇紹介～

【レアンドロ・エルリッヒ《まっさかさまの自然》2024】

これは真っ逆さまの森で、転倒しています。

【ビアンカ・ボンディ《森林浴》2024】

これも森林浴ということで、レモングラスの枝がすごい香りになって出ています。

【妹島和世《あしあと》2024】

これは動く、動物のように歩きだす椅子のイメージです。

【アンリ・サラ《未来はかすかに響く歌》2024】

井倉洞という洞窟の中を登っていくのですが、45 分間の体験で洞窟をどうやって知るかというビデオです。

【ゲッコーパレード出張公演　家を渉る劇 vol.6『バイオマス・マクベス』】

森林が70パーセントを占めるこの日本で、未来への課題はどうやってこの森林資源をエネルギーに変えるかということです。バイオマス発電は各地で行われていますが、この場所を使って、芸術祭の関連企画としてマクベスのパフォーマンスを行いました。マクベスの話はご存じだと思いますが、マクベスが敗れるという予言で語られた条件が、バーナムの森が動いたらという話でした。参加した方が全員木を持って一緒に歩く、みんながバーナムの森になるということで、現状を変えるバイオマス発電の意義を知るという設えでした。

芸術が身体を通して感覚的なセンサーを上げていくこと、そして違う考え方を端緒に持つということを、さまざまなメディアを通してアーティストは実践しています。サステイナビリテイにむけていろいろなかたちで情報を共有したり、体験を共有したりすることにより、より先の議論へ持っていくことができるのではないかということが今日のお話でした。 ご清聴ありがとうございました。

（終了）